

円熟のワーグナー高らか

メゾソプラノ池田香織、大阪国際フェス出演

日本を代表するメゾソプラノの一人、池田香織が大坂でワーグナーを歌う。第58回大阪国際フェスティバル2020で、飯守泰次郎の指揮する関西フィルハーモニー管弦楽団の特別演奏会(主催・朝日新聞社、朝日新聞文化財団など)に出演。コロナ下で来日できなくなった外国人歌手の代役を務める。

昨年3月に完結した滋賀県立芸術劇場びわ湖ホールの主制作オペラ「ニーベルングの指環」での、ブリュンヒルデ役が記憶に新しい。4年間かけて上演した4部作の核となる存在で、出世作にもなった。強靱な体力と豊かな声量、深い表現力を必要とする役でもあり、ワーグナー歌手の「称号」にふさわしい出来だった。

一線で活躍する声楽家としては珍しく、音大を出ずに合唱経験を積んできた。新国立劇場の開館した1997年、同じ舞台に立ったのが、後に

師匠となる小山由美(メゾソプラノ)だ。2001年に小山の稽古時の代役を務め、飯守のもとでワーグナーを学んだ。「歌手としての本当のスタート地点」と振り返る。

今回の演奏会には元々、万一の時の代役として控えていた。「尊敬するマエストロである飯守先生が私を信じてオフアーしてくださいました。本番に出ることがなくても、きちんと代役を務めようと準備してきた」。直前の出演決定にも「何も変わらない」と冷静だ。ワーグナー作品が難しいとされる理由の一つが、情報量

の多さだ。作曲家本人の指示が台本にも細かく書き込まれている。心がけるのは、楽譜や指揮者の要望を「イタコのように再生」すること。楽譜を読み込むほどおもしろい。決まった型があっても、誰もが同じようにはなりません。

わかりやすい解釈や演出もあるが、池田はまっすぐなアプローチを提案する。「オペラだって娯楽。かっこよさが伝われれば楽しんでもらえる。昨春生配信されたびわ湖ホールの「神々の黄昏」には、「オペラは初めて」という層からも好意的な反応が相次いだ。コロナ禍のなかで歌と飛沫の関係が取りざたされ、「歌うことが悪いような気持ちになった時もあった」。舞台上の制約やマスクをつけた稽古はまだまだ続きそうだが、「制限があっても思い切り良

えています。

ワーグナー作品への強い憧れと深い愛情をもち、日本のワーグナー上演を支える代表的な歌手の一人です。彼女が今回、ワーグナー前期、中期、後期それぞれの作品を鮮やかに描き分けてくださることを、大変楽しみにしています。



鮮やかに描き分け

飯守泰次郎のコメント 池田香織さんは、長年共演している、私が最も信頼する歌手の一人です。じっくりと自分の声とレパートリーを培い、聡明にキャリアを積み重ねてきた彼女の歌唱は、今まさに円熟の時を迎

い音楽を届けたい。何も無いと自分がダメになってしまう」と前を向く。



④メゾソプラノの池田香織 ©井村重人
⑤ワーグナーのオペラ「神々の黄昏」でブリュンヒルデを演じた池田香織 =2020年3月、びわ湖ホール提供

「飯守泰次郎×関西フィルハーモニー特別演奏会」は、大阪市北区のザ・シンフォニーホールで23日午後4時開演。「タンホイザー」や「ニーベルングの指環」から有名曲を抜粋。85000円、65000円。問い合わせは関西フィル(06・6577・1381)。(富岡万葉)